# 救命センターにおける新型コロナウイルス感染症の対応－③

～COVID-19 対応により治療のタイミングを逸した 1 例～

◎黒田舞子[1)]、清水 楓梨[1)]、吉田 元治[1)]
大阪府立中河内救命救急センター[1)]

【はじめに】当センターは、大阪府東部の東大阪市にある独立型の救命救急センターで、中河内医療圏（東大阪市・八尾市・柏原市）の三次救急医療を担っている。病床は 30 床（ICU8 床・ HCU8 床・一般病棟 14 床）で、2020 年 4 月より、COVID-19 患者以外の救急搬送を継続しながら、COVID-19 患者の受け入れを開始した。2021 年 10 月末までに 218 名の人工呼吸器を必要とする COVID-19 患者が搬入された。第 4 波の際、大阪府では重症病床の使用率が 100%を超え、当センターで準備した 10 床の重症病床は常に満床で稼働していた。全ての医療機関が対応に追われる中、当センターに COVID-19 疑いで搬入されるも急激な経過をたどり、救命し得なかった 20 代女性の症例について報告を行う。

【症例】20 代女性。2 日前より発熱し、前日に近医にて SARS-COV-2 の PCR 検査を実施したが陰性であった。当日、呼吸苦が増悪し、COVID-19 疑いとして当センターに救急搬送された。搬入時、SARS-COV-2 の PCR 検査、抗原定性検査はともに陰性であった。気管挿管、人工呼吸管理を開始した。血液所見では著名な WBC 上昇と LDH の上昇を認め、Fibrinogen と PLT は減少しており、DIC を呈していた。末梢血の塗抹鏡検で Auer 小体が束状になった faggot 細胞を認め、急性前骨髄性白血病が疑われた。CT 撮影中に血圧低下、心肺停止となり胸骨圧迫を施行した。アドレナリン投与し、ROSC するも再度心肺停止となった。蘇生困難であり、搬入約 3 時間後に死亡確認となった。家族によると、10 日前に転倒した際、足に巨大な皮下血腫を認めていたとのこと。また、挿管時には口腔内からも出血を認めた。

【考察】コロナ禍において、発熱や呼吸苦などの症状を有する患者は医療機関への円滑な搬送が困難となっていた。また、外出自粛による受診の控えも生じていた。その結果、適切なタイミングで適切な治療を受けることができない患者が増加していた。本例も、コロナ禍でなければもう少し早い段階で適切な検査が実施され、適切な治療が開始されていれば、救命し得たのではないかと考えられた。今回、症例報告を行うことで、今後、防ぎ得た死が少しでも減ることを願う。

連絡先 06-6785-6166